

3DPholeの方がCADrefとの誤差が大きかった。3DPrefにおける0.020～0.029mmの誤差は、有意ではあったが、今回使用した3Dプリンタ自体の精度の限界値以下であった。一方、3DPrefでの0.072mmの誤差はアナログを模型に挿入する際の作業上の誤差も包括していると考えられる。

結論：DLP方式の3Dプリンタで製作された作業模型において、製作後14日目までに生じる経時的な寸法変化は臨床上に許容できる範囲内であった。しかし、作業模型製作時の寸法精度に関しては、全顎に渡るような長い距離では誤差が大きくなり、注意が必要である。

5. 上顎大白歯部にみられた双生歯と思われる一例

A case of suspected geminated tooth observed in the maxillary molar region

○平山 和征, 小川 淳\*, 古城 慎太郎\*, 池田 裕之介, 宮本 郁也\*, 山田 浩之\*, 高橋 徳明\*\*, 泉澤 充\*\*, 藤原 尚樹\*\*\*, 藤村 朗\*\*\*\*

岩手医科大学歯学部卒後臨床研修歯科医師, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野\*, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野\*\*, 岩手医科大学解剖学講座機能形態学分野\*\*\*, 岩手医科大学歯学部口腔医学講座歯科医学教育学分野\*\*\*\*

【緒言】双生歯は歯の形態異常の一種で、正常歯胚がその側に発生した過剰歯胚と合一し歯髓の一部が共通になった歯と定義されている。今回、われわれは上顎大白歯部に生じた双生歯と思われる症例を経験したので、その概要を報告した。

【症例】患者は43歳の男性、総合歯科より、上顎右側臼歯部の過剰歯の抜歯目的に当科を受診した。過剰歯は二咬頭性で第二、第三大白歯間

頰側に萌出していた。過剰歯の形態は単純エックス線写真では判然とせず、歯科用コーンビームCT画像では近遠心的に扁平で2咬頭性だった。抜去歯のマイクロCT画像では歯髓を共有し癒合した2つの歯冠が認められ、双生歯を示唆する所見であった。

【結語】上顎大白歯部に生じた双生歯と思われる歯に関し、詳細な画像所見を含め報告。鑑別診断として癒合歯、癒着歯も考えられ、これらの歯の形態異常の定義についても考察した。

6. 顎下部非クロストリジウム性ガス壊疽の1例

A case of nonclostridial gas gangrene in the submandibular

○齋藤 勇起, 川井 忠, 角田 直子, 小松 祐子, 小泉 浩二, 山内 博仁, 小川 淳, 宮本 郁也, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野

目的：今回、われわれは顎下部非クロストリジウム性ガス壊疽の1例を経験したので報告する。

症例の概要：患者は92歳、男性。右側顎下部の腫脹を主訴に2020年8月当科受診となった。経口抗菌薬を投与したが、腫脹は増大した。第7病日に造影CTを撮影したところ、右側頰部から顎下部にかけて遊離ガスを伴う膿瘍形成がみられた。即日入院管理となり、同日全身麻酔下に気管切開術、切開・排膿術、壊死組織除去術を行った。術後は抗菌薬の点滴静注を行い、炎症症状は軽減した。第15病日には原因歯である48を抜去した。嚥下リハビリテーション目的に近医へ転院となり、経過良好である。

考察：ガス壊疽は深部での病変の重篤さの割に臨床所見が現れにくく、診断が遅れがちなため、死亡率が高い。頭頸部におけるガス産生感染症患者には、早期の診断と、必要に応じた外科的消炎処置が重要と考えられた。